

### 第三章 光る源氏周辺の人々の物語 内大臣家の物語

[第一段 齋宮女御の立后と光る源氏の太政大臣就任]

\*かくて(こうして若君の宮仕えは始まりましたが、この年は朝廷に於いては)、后みたまふべきを(立后される運びとなっていて)、 \*「かくて」は「こうして」だから、現代の語法ならく直前の文を展開するときに用いる接続詞>かく直前の文を説明句に用いる副詞>なので、このように全く別の話題につながる語法は素直には理解できない。私には脱稿があるような気がしてならないが、注には<冷泉帝即位して五年になる。后が今まで未決定のままであった。>とあって、訳文は<そろそろ、立後の儀があつてよいころであるが、>とあり、「かくて」については話し全体の時の流れとして「そろそろ」と言葉を濁している。勿論、本文が斯く在る上はそれ自体は受け入れざるを得ないし、このように話題がいきなり他へ移る展開もこの物語では既に何度もあつて、また誤訳を避けるために補語を控えて掲載するのは研究者としての一見識かも知れないが、当時の宮廷読者でもない現代一般人の言葉にする為には、それなりの工夫は冒険ではない筈だ。現に訳文でも「后位賜ふべき」の逐語<後の地位を何方かに宣旨でお決めに為るべき>を「立後の儀があつてよいころ」とは言い換えてある。まして私は無責任な素人なので、このように自分なりに勝手に補語して言い換える。ともかくも、年末まで進んだ話は藤壺中宮の忌明けとなった4月か、若君の学生生活が始まった5月頃に戻るらしい。で、登場人物の年齢を改めて整理すると、帝は15歳、齋宮女御は24歳、弘徽殿女御16歳、冠者の君12歳、光君は33歳、といったところ。

「齋宮女御をこそは、母宮も、後見と譲りきこえたまひしかば(御自分に代わつて帝のお世話を譲り申しなさった方なのだから)」と、大臣もことづけたまふ(大臣も故藤壺入道宮の筋を立てて推薦なさいます)。

\*源氏のうちしきり后にみたまはむこと(すると藤壺中宮に続いて王家神職筋の齋宮女御が後の座にお着きに成ることに)、\*世の人許しきこえず(他諸家の貴族が反論なさいます)。 \*注に<この場合の「源氏」は皇族出身の意。桐壺帝の藤壺の宮に引き続いて冷泉帝の前齋宮の女御の立后をいう。>とある。齋宮女御は故六条御息所の御息女だが、実父は桐壺帝の早世した弟宮であった。 \*「世の人」は此処では諸貴族家に違いない。権威の象徴である形式尊家の王族純化では、諸豪族の利害調整を収めきれず国体が危ぶまれるという実務事情のルポなのだろう。実態はこの記事より遥かに凄みがあつたはずだ。

「弘徽殿の(藤原家の弘徽殿女御が)、まづ人より先に参りたまひにしもいかが(梅壺女御より先に入内なさっていたこともあるし)」

など、うちうちに(それぞれの身内で)、こなたかなたに心寄せきこゆる人びと(双方に付いて加勢する人たちが)、おぼつかながりきこゆ(どうなることかと言ひ合います)。

兵部卿宮と聞こえしは、今は\*式部卿にて、この御時には(今上帝の御世に於いては)ましてやむごとなき御おぼえにて\*おはする(母宮の血縁となる伯父宮に当たるので特に格別に帝が親しみなさつていらするところの)、御女(おんむすめ、その御息女が)、本意ありて参りたまへり(念願どおり入内なさつていらっしゃいました)。 \*注に<藤壺の宮の兄、紫の上の父宮をさす。>とある。 \*「おはする」は注に<連体中止法。述語であるとともに「御むすめ」をも修飾する。>とある。

同じごと(この姫も斎宮女御と同じように)、王女御にて(わうのによごにて、王家筋の女御で)さぶらひたまふを(いらっしやいましたので)、

「同じくは(同じ王家筋なら)、御母方にて親しくおはすべきにこそは(より母宮に近い血縁である此の御方の方こそが)、母后のおはしまさぬ御代はりの後見に(故宮に代わるお世話役ということに、なら適役だろう)」とことよせて(と理由立てて)、似つかはしかるべく(後に相応しいと)、とりどりに思し争ひたれど(三人の争いになったが)、なほ梅壺ゐたまひぬ(やはり梅壺女御が後に御成りになりました)。

御幸ひの(この斎宮女御の御幸運を)、\*かく引きかへすぐれたまへりけるを(表向きの筋では最も分が悪いにも関わらずでいらしたので)、世の人おどろききこゆ(宮中の人々は意外だと話していました)。\*「かくひきかへ」は注に<母六条御息所の人生との比較。>とある。が、無茶な注だ。「かく」は<このように>であり<上述してきたように>であり<上述してきたような諸事情を>「ひきかへ(引いて比べると)」なのだから、「かくひきかへ」は<上述してきたような諸事情に於いては分が悪いのにも関わらず>なのであり、特段の注釈は不要な箇所であり、このノートも蛇足かも知れない。

大臣(またこの度の人事で源氏の内大臣は)、太政大臣に上がりたまひて、大将(藤原の大納言である右近衛大将は)、内大臣になりたまひぬ。世の中のことも政りごちたまふべく\*譲りきこえたまふ(光君はこの一連の処遇で各勢力の均衡が取れたと判断して、義兄に政務を執るように譲りなさいました)。\*光君が内大臣に実権を譲ったということは、義兄が藤氏長者として予算を差配することを意味するのだろう。今まででも光君に実務上の行政能力、とは即ち実際に有力勢力を動かせる人脈、は無かっただろうから藤原氏を頼ったに違いないが、行政判断や人事決定の権威付けは光君がしていたのだろう。その決定権を、光君の意に反しないことが期待できるとはいえ、内大臣に譲ったということは、藤原氏左大臣家の世代交代が無事に収まった事を意味し、当面の政治体制が固まったことになるのだろう。結構重要な一文かと思う。いや勿論、斎宮女御の立后が決するまでは、藤原殿を大臣格に引き上げて、大臣同士で撰閣家の地位を競うのは分が悪いとか、キナ臭いとか、いう光君の事情はあった。しかし、それは誰の目にも歴然としていて、当然に藤原大将は大臣就任を朝廷に強く働きかけたに違いない。そして、藤原氏が一致して大将を大臣に推挙したら、朝廷はその実勢力からして、その人事を認めざるを得なかっただろう。だから光君は、それを阻止する為に藤原氏の内部対立を煽るような人事を弄していたのかも知れない。そういう表向きの政争は女房は語らないので不明だが、要するに此处に至って客観状況として政情が治まった、ということは確からしい。

人がら(その内大臣の人柄は)、\*いとすくよかに(とても立派な体格で)、きらきらしくて(堂々としていて)、心もちみなどもかしこくものしたまふ(政治家としての心構えもしっかり持って御出です)。\*「すくよかに」「きらきらし」はどちらも幅の在る修辭で、<堅実ではっきり物を言う>くらいにも取れるようだ。また、注には<『完訳』は「内大臣の性格。「すくよか」は剛直で意志を貫く性格。「きらきらし」は派手好みで威を張る性格」と注す。>とある。ただ、今に伝わる言葉での「健やか」で「きらびやか」な、<性格>というよりは本文の文字通りの「人柄」として考えると、<健康な体>と<目立つ威容>が素直な解釈だ。

学問を立ててしたまひければ(また学問を良くなさった人なので)、\*韻塞には(ゐんふたぎ、漢詩文の韻字当て遊びでは)負けたまひしかど(光君に負けなされたことが有ったとはいえ)、公事に(おほやけごと、行政実務には)かしこくなむ(長けていました)。\*注に<「賢木」巻の韻塞ぎを

さす。>とある。「賢木」巻の韻塞ぎの場面も多くの博士を二条院に招いて、光君と義兄は詩文作りに興じていた。それが今の場面に似通っているだけに時の推移を思わせる、ということか。当時は10年ほど前のことで、朱雀帝の御世で桐壺院が崩御した後の右大臣家に権勢が移った光君不遇時代で、時の尚侍の君との密会露見直前の、手持ち無沙汰を詩会や音楽会で紛らわせていた、華やかで破天荒で危うい傑出した劇構成の青春時代の描写だった。

腹々に御子ども十余人(内大臣には幾人かの妻妾腹に御子たちが十余人あり)、おとなびつつものしたまふも(それぞれ成人なさっていて)、次々になり出でつつ(順々に出世なさって)、劣らず栄えたる(他の藤原諸氏に劣らず優勢を誇る)御家(おんいえ、御一族)のうちなり(の内の一つなのです)。

女は(その内でご息女は)、女御と今一所なむおはしける(弘徽殿女御ともう一人だけがいらっしやいました)。わかむどほり腹にて(その方は内親王腹の御子で)、あてなる筋は劣るまじけれど(高貴な血筋は弘徽殿女御の母君が右大臣家の四の君であることに劣るものではなかったが)、その母君、\*按察使大納言の北の方になりて、さしむかへる子どもの数多くなりて(今の夫との間に儲けた子供の数が多くなって)、「それに混ぜて後の親に譲らむ(それらの子供と一緒に継父に養育を委ねる事は)、いとあいなし(都合が悪い)」とて(と我が娘としては家格が相応しくないということで)、とり放ちきこえたまひて(大臣は実母からその子を引き離し申しなさって)、大宮にぞ預けきこえたまへりける(大宮に養育を任せ申しなさったのです)。 \*「あぜちのだいなごん」は律令政府に於いては全権の地方視察監督官だったらしいが、平安期では名誉職だったとのこと。実権は無いが高官の貴族には違いない。十年ほど前の当時は、左大臣家の活発な若君であっただろうだけに縁遠くなったのか、この藤原殿を頼り切れず、名誉大納言を頼らざるをえない母君の事情だったのだろう。

女御には\*こよなく思ひおとしきこえたまひつれど(大臣はこの御息女を弘徽殿女御には比べるまでも無く、遠く及ばない立場に考え申しいらっしやったが)、人がら、容貌など、いとうつくしくぞおはしける(性格や容姿は大変可愛らしい姫で御出ででした)。 \*「こよなく思ひ劣す」は<比べようも無く低く考える>だが、下に「うつくし」とあるので、大臣はこの姫も大事な娘とは思っていたようで、その<低さ>は<身分の低さ>なのだろう。が、<身分の低さ>と言っても王家筋である。だから逆に、王家筋と言っても今上帝や大宮とは少し遠い血縁の家柄なのだろう。それに引き換え、弘徽殿女御の母君は右大臣家の四の姫である。現下の政治力学上、弘徽殿女御が藤原勢の相当な均衡点であろうことは窺える。ある意味で、その左右藤原家の均衡ゆえに斎宮女御は弘徽殿女御に優れて後の地位に納まったのかも知れない。何しろ光君が今上帝の実父であることなど、その疑いさえ周囲に持たれてはならない禁忌なのだから。それにしても、作者のこの辺りの事情説明の雄弁さには恐れ入る。この文は言わば、大臣のもう一人の娘の紹介に過ぎない筈だが、斎宮女御の立後のあらましに続いて同時期らしい光君と義兄の昇進が述べられた後に語られる構成という話の運びで、しっかりと全体の事情を描いている。尤も私のような者にとっては注意しながら読まないと分かり難い文ではあるが、実際の類似事情も言葉遣いの空気感も作者と共有していただろう当事の宮廷読者たちは、男文字のように権力抗争を客観的に明示して書かないからこそ、逆に力関係の臨場感を実感出来たのではないかとさえ思えるほどだ。

[第二段 夕霧と雲居雁の幼恋]

冠者の君(学生の若君はこの御息女と)、一つにて生ひ出でたまひしかど(大宮の許で一緒にお育ちなさったが)、おのおの十に余りたまひて後は(それぞれ十歳を過ぎた後は)、御方ことにて(お部屋を別にして)、

「むつまじき人なれど(慣れ親しんだ人であっても)、男子には(をのこご、男の子とは)うちとくまじきものなり(分けて育てなければいけないものだから)」と、\*父大臣(ちちおとど、父親である大臣が)聞こえたまひて(申し付けなされたので)、 \*「大臣」と言うのは今の地位で、つい最近まで右近衛大将だった人であり、当時は中将で、参議に成ったばかりくらいの時期の話だ。ただ、この義兄は少なくとも光君よりは5,6歳は年上なので、今年で39,40歳くらい、10年前でも30歳くらいではあっただろう。なお、源氏の若君はこの年で12歳だから10年前なら2歳だが、「おのおのとをにあまりたまひて」とあったから大臣の息女は若君と同じ年か、せいぜい1歳違いくらいなのだろう。で、引き離されたのは2年前くらいだ。

けどほくなりたるを(遠慮がちに成ったものの)、幼心地に思ふことなきにしもあらねば(若君は幼心に息女が気になっていた)、\*はかなき花紅葉につけても(手近な春の花や秋の紅葉を手にして)、雛遊びの追従をも(姫の人形遊びに添えたりと)、ねむごろにまつはれありきて(親しく付きまといなさって)、心ざしを見えきこえたまへば(好意をお見せ申しなさると)、いみじう思ひ交はして(姫君も実に仲良くなさって)、\*けざやかには(几帳や障子でしっかり遮る様には)今も\*恥ぢきこえたまはず(今でも顔をお隠し申しなさいません)。 \*「はかなき花紅葉」に付いては、注に<以下、夕霧の雲居雁に対する動作行動。源氏の藤壺に対する行為についても、「幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる」(「桐壺」第三章五段)とあった。>とある。面白い指摘だ。ただ、若君を「夕霧」、姫を「雲居雁」と呼称する注釈には違和感を覚える。そうした呼称は未だ本文には語られていないので、この時点でそう呼ぶのは注釈者の勝手が過ぎる。今は<若君>と<姫君>と呼ぶのが本文の注釈に相応しい。\*「けざやか」は<明瞭なさま>と古語辞典にある。で、<明瞭に>如何するののかと言えば、「恥づ(隠す)」なのだから<遮断する>ワケだ。そこで、現代語では「几帳」や「障子」の補語は必須かと思う。 \*「恥づ」は<人に見られることを恐れる>と古語辞典にある。此处ではより具体的に<顔を隠す>と読む。いくら女が男の目を避ける風習だと言っても、一緒に遊んでいるのだから、今さら<姿を隠す>とは読めない。尤も、<顔を隠す>も物理的には不自然だが、心理的な「恥じらい」なら「人見知り」だから、普遍的に説得力がある。その「人見知り」が無いほどに姫は若君に親しんでいるとも、まだ思春期にもなっていないとも、受け取れる。その意味では「けざやかには今も恥ぢ聞こえ給はず」を<面と向かってと今でも目を合わすのをためらいなさらぬ>とも読めそうな気がする。

御後見どもも(御二人の養育係の女房たちも)、

「何かは(何ほどの事も無いでしょう)、若き御心どちなれば(幼い子供同士なので)、年ごろ見ならひたまへる御あはひを(長年慣れ親しんでいらした間柄を)、にはかにも(急に)、いかがはもて離れ(どうして引き離して)はしたなめはきこえむ(気詰まりにさせられましようか)」

と見るに(とっていて)、女君こそ何心なくおはすれど(姫君の方こそ女心というほどのものは無さそうでしたが)、男は、さこそものげなきほどと見きこゆれ(若君の方はそんな男の猛りなど無さそうにお見受け申したのに)、\*おほけなく(早熟に情交して)、いかなる御仲らひにかありけむ(どれほど深い仲に成っていたものやら)、よそよそになりては(学生として二条東院に別れてからは)、これをぞ静心なく思ふべき(姫に逢えない事を気に病んでいたようです)。 \*「おほけ

なし」はく身の程をわきまえない、大それている>またはく畏れ多い>と古語辞典にある。若君にく大それた>と言うのも馴染まないし、く畏れ多い>も大袈裟だ。しかし、何をしたのは明白だ。若君を「をとこ」と呼び、姫君を「をんなぎみ」と呼んでいるのだからく聞で情交した>のである。それが「見きこゆれ」と逆接条件の已然形を受けてく意外だった>のだから、生理描写と考えてく早熟にも情交して>と読むべきだろう。

まだ片生ひなる手の(まだ子供らしい筆跡の)生ひ先うつくしきにて(将来の上達が窺われる字体で)、書き交はしたまへる文どもの(書き交わしなさったお二人のお手紙の幾つかが)、心幼くて(幼心の不用心さで)、おのづから落ち散る折あるを(寝所に無造作に落ち散らかしてあるのを見て)、御方の人びとは(姫君付きの女房たちは)、ほのぼの知れるもありけれど(うすうす御二人の仲を知ることあったが)、「何かは(今さら何も言えたものではない)、かくこそ(こうなってしまつては、中途半端な事の露見は自分たちの管理責任が問われてしまうので、あとはもう成り行きに任せる他は無い)」と、誰にも聞こえむ(と口外しませんでした)。見隠しつつあるなるべし(見て見ぬ振りを決め込んだのでしょう)。

### [第三段 内大臣、大宮邸に参上]

\*所々の(光君と義兄藤原長者それぞれの昇進祝いの)大饗(だいきやう、大宴会の)どもも果てて(数々も終わって)、世の中の御いそぎもなく(朝廷行事の準備も無く)、のどやかになりぬるころ(長閑に成った晩秋の頃に)、時雨うちして(時雨がざっと降って)、\*荻の上風も(おぎのうはかぜも、荻野を渡る風も)ただならぬ夕暮に(いつになく寂しい夕暮れに)、大宮の御方に(大宮の御宅に)、内大臣参りたまひて(内大臣が伺いなさつて)、姫君渡しきこえたまひて(御部屋に姫君をお呼び寄せになり)、御琴など弾かせたてまつりたまふ(お琴などを弾かせ申し上げなさいます)。宮は、よろづのものの上手におはすれば(大宮は何事にも長けていらしたので)、いづれも伝へたてまつりたまふ(あらゆる弦楽器を姫君に教え申しなさっていました)。\*「ところどころ」は注にく源氏と内大臣のそれぞれの昇進の大饗をさす。>とある。\*「荻の上風もただならぬ夕暮れ」は注にく『源氏積』は「秋はなほ夕まぐれこそただならぬ荻の上風萩の下露」(義孝集・和漢朗詠集)を引歌として指摘。>とある。「オギ」も「ハギ」も秋の花として有名だが私は良く知らない。で、Webサイト「花300」などの文や写真を参照すると、「オギ」は「ススキ」と同じイネ科で尾花状の形態も良く似ている。概して「オギ」は「ススキ」より華奢で白いらしい。「ハギ」はマメ科の木で、秋の七草にクサのように数えられるが、しっかりした幹に枝をつけて白や紫の小さい花をつける。ただ低木で大きな木にはならないから、草のような印象になるらしい。どちらも遠目に見覚えのある花だ。なるほど、荻は高さがあって地下茎で群生した野原の上を風が吹く。そして、萩は足元に小さな花をたくさん咲かせてその下露を偲ばせる。

「\*琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれど、\*らうらうじきものにはべれ(琵琶というものは女が弾くと生意気なようだが、姫の腕前は実に見事なものだから、人前で遠慮することは無いだろう)。\*注にく以下「何の親王くれの源氏」まで、内大臣の詞。宇津保物語に「琵琶なむ、さるは女のせむにうたて憎げなる姿したるものなる」(初秋巻)とある。>とある。宇津保は確か、琴の名器と名手の話だったと思う。\*「らうらうじ」はく物慣れている、習熟している>。「はべれ」は「なれど」の逆接を受けた已然形なので順接条件の提示のはずで、「はべれば～」の省略止めになっているので、「～」を勝手にく臆することなからむ>と補語した。

今の世にまことしう伝へたる人(今の世にこれほど正しく奏法を引継ぐ者は)、をさをさはべらずなりにたり(もう滅多に居なくなってしまった)。何の親王(なにのみこ、何とか言う親王や)、くれの源氏(くれのげんじ、かんとか言う元王族くらいだ)」

など数へたまひて(などと大臣は数え上げなさって)、

「女の中には、太政大臣(おほきおとど)の、山里に籠め置きたまへる人こそ(大堰山荘に囲っていらっしゃる人こそ)、いと上手と聞きはべれ。物の上手の後にはべれど(名人奏者の家系ながら)、末になりて(絶えかかった子孫になって)、山賤にて年経たる人の(田舎暮らしで長年過ごした人が)、いかでさしも弾きすぐれけむ(どうしてそれほど達者に演奏できるものなのだろう)。

かの大臣、いと心ことにこそ(格別に感じ入っては)思ひてのたまふ折々はべれ(そう思って仰る事が何度かありました)。異事よりは(ことごとよりは、他の事に比べて)、遊びの方の才は(音楽の方の上達は)なほ広う合はせ(やはり多くの人と合奏し)、かれこれに通はしはべるこそ(いろいろな楽器や奏法を知ってこそ)、かしこけれ(進むものなのに)、独り事にて(鄙びた田舎で独学をして)、上手となりけむこそ(上手くなったのなら)、珍しきことなれ(珍しいことです)」

などのたまひて、宮にそそのかしきこえたまへば(宮に琵琶を弾くように薦め申しなさると)、

「\*柱(ちう、指盤を)さすこと(押さえる事が)うひうひしくなりにけりや(久しぶりで覚束無く成ってしまっていますが)」 \*「じゅう」は琵琶の指盤。琴の音階調弦に用いる張り支柱具は<ち、じ>で「琴柱(ことち)」と言う、とある。

とのたまへど、おもしろう弾きたまふ(宮は見事にお弾きになります)。

「幸ひにうち添へて(その山荘の人と言うのは幸運な上に)、なほあやしうめでたかりける人なりや(さらに珍しく優れた人のようですね)。老いの世に(ずいぶん長いこと)、持たまへらぬ(授かりなさらなかった)女子を(をんなごを、女の子を)まうけさせたてまつりて(光君に儲けさせ申し上げて)、身に添へても(手離さずにいて)やつしむたらず(その子を見すばらしくさせることも無く)、やむごとなきに譲れる心おきて(高貴な正夫人に養育を任せた心構えで)、こともなかるべき人なりとぞ聞きはべる(事を荒立てる事の無い実に良く心得た人だと聞いております)」

など(などとも宮は)、かつ御物語聞こえたまふ(加えてお話なさいます)。

#### [第四段 弘徽殿女御の失意]

「女はただ\*心ばせよりこそ、世に\*用ゐらるるものにはべりけれ(女は偏に心がけしだいで、世の中に重用されるものですから)」 \*「こころばせ」は古語辞典に<心の姿>とあり、主に<人格>ともある。広く言えば「考え方」、狭く言えば「配慮・気遣い」などだろうか。注には<『集成』は「心がけのいかんによって」。『完訳』は「気立てしだいで」と訳す。>とある。「心がけ」も「気立て」も少し物足りないが、明石君の今の状況は決して「心の問題」だけに拠って形作られている訳ではないので、元々「心ばせ」と言う言葉で明石君を説明し

切れないのだから、その言い換えの正解は詰めようが無い。 \*「もちゐる」は「持ち率る」であり<引き立てる、採用する>と古語辞典にある。

など(などと大臣は)、人の上のたまひ出でて(明石君の身の上をお話しなさって)、

「女御を(私は娘の弘徽殿女御を)、けしうはあらず(特に悪い所も無く)、何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしの思ひたまへしかど(何事も人に後れを取るようには育てなかった心算と存じておりましたが)、思はぬ人におされぬる宿世になむ(思わぬ人に圧されるという運命と成ってしまつて)、世は思ひのほかなるものと思ひはべりぬる(世の中は思い通りには行かないものと思ひ知りました)。この君をだに(だからこの姫だけでも)、いかで思ふさまに見なしはべらむ(何とか後の座に着きたいものと考えています)。

\*春宮の御元服、ただ今のことになりぬるをと(皇太子の成人式がもう間近になったことだからと)、人知れず思うたまへ心ざしたるを(私は密かに姫の入内を考え申して心積もりをしています)、かういふ幸ひ人の腹の后がねこそ(こういう幸運な人が生んだ后候補といった者が)、また追ひ次ぎぬれ(また後から追いついて来ていまして、)。立ち出でたまへらむに(あちらの姫が入内なさったら)、ましてきしろふ人ありがたくや(ますます競い立つ人は出難くなってしまう事でしょう)」 \*「とうぐう」は朱雀院の第一子で、承香殿女御(じゃうきやうでんの)によご、恐らく右大臣家伯父の娘であった従兄妹腹。「げんぶく」は<十二歳前後が多かつた>とあるから、12歳に近かつたと見て置く。「成人式」であれば公に一人前としてのお披露目をする儀式が最大の催しだが、本人にとって最大の関心事は新妻との初床入り、に違いない。

とうち嘆きたまへば(と後宮事情を嘆きなされば)、

「などか、さしもあらむ(何も、そうと決まつたものでもないでしょう)。この家にさる筋の人出でものしたまはで止むやうあらじと(この家から后になる人が御出でにならないままで終わってしまうような事は有つてはならないと)、故大臣の思ひたまひて(亡き父大臣がお思いになつて)、女御の御ことをも(孫の女御の立后も)、\*ゐたちいそぎたまひしものを(熱心に用意なさつていらしたので、)。おはせましかば(ご存命であつたら)、かくもてひがむることもなからまし(このように他の人に押し曲げられることも無かつたでしょうに)」 \*「居立つ」は<座ったり立ったり忙しく、熱心に世話する>と古語辞典にある。

など(などと大宮も)、この御ことにてぞ(この事ばかりは)、太政大臣をも(おほきおとどをも、光君までも)恨めしげに思ひきこえたまへる(恨めしく思い申しなさいました)。

姫君の御さまの、いときびはにうつくしうて(とても幼げで可愛らしく)、箏の御琴弾きたまふを、御髪のがり(髪の下がり具合や)、髪ざしなどの(額の生え際などの)、あてになまめかしきを(上品で艶々しているのを)うちまもりたまへば(大臣がじつとご覧になると)、恥ぢらひて(姫は恥らつて)、すこしそばみたまへるかたはらめ(少し身を細めなざる横顔の)、つらつきうつくしげにて(顔つきが整つて見えて)、\*取由の手つき(前かがみで左手で弦を押して音程を変える手つきが)、いみじう作りたる物の心地するを(とても良く出来た人形のように感じられるのを)、宮も限りなくかなしと思したり(大宮も大変可愛いとお思いになりました)。\*搔きあはせなど弾

きすさびたまひて、押しやりたまひつ(姫は試し弾きを少しなさただけで、弾くのを止めて琴を前へ押しやっつてしまいなさいました)。 \*「とりゆ」は琴の奏法で、左手で琴柱の先を押し弦して音程を変える・揺らす、とのこと。ギターのチョーキングに似る効果。 \*「かきあはせ」はくためしひき、音合わせ。

#### [第五段 夕霧、内大臣と対面]

大臣、和琴ひき寄せたまひて、\*律の調べのなかなか今めきたるを(哀愁のある律調子の何とも今の秋の風情に合う曲を)、さる上手の(名手であるこの大臣が)乱れて掻い弾きたまへる(気任せに爪弾きなさるのは)、いとおもしろし(とても気分が深まります)。御前の梢ほろほろと残らぬに(庭先の枝の枯葉がはらはらと落ち切った日頃に)、老い御達など(古女房たちなどが)、ここかしこの御几帳のうしろに(其処此処の御几帳の後ろに姿を隠して遠慮しながら)、かしらを集へたり(聞き惚れて集まっていました)。 \*「りちのしらべ」は中国の伝統的な音階である十二律を基にした曲の旋律法の一つ、とある。その旋律法は大きく、長調の「呂旋」と短調の「律旋」に分けられるらしいが、音楽理論が西洋と中国とでは違いうだろうし、加えて日本独自の旋律解釈もあって単純比較は無理のようだが、この時雨空に「今」めかしていたのなら「律の調べ」は秋の哀愁を表現しているのだろう。

「\*風の力蓋し寡し(かぜのちからけだしすくなし、風で葉が落ちたのではない)」 \*注に<内大臣の朗誦。「落葉、微風を俟(ま)ちて隕(お)つ。而も風の力、蓋し寡し。孟嘗(まうしゃう)め、雍門(やうもん)に遭うて泣く。而も琴の感(しかもきんのかん)、已に未し(すでにいまだし)」(文選、豪士賦)の一節。>とある。また、出典参照には「落葉俟微風以隕 而風之力蓋寡 孟嘗遭雍門而泣 琴之感以未(文選卷四六一豪士賦序)」とある。「文選(もんぜん)」は<中国の詩文集。梁の昭明太子(蕭統(しょうとう))の編。6世紀前半に成立。周代から梁まで約千年間の代表的文学作品760編を37のジャンルに分けて収録。30巻であったが、唐の李善が注をつけて60巻とした。中国古代文学の主要資料で、日本にも天平以前に渡来、平安時代に「白氏文集」と並んで広く愛読された。>と大辞泉にあって詩文の傑作集らしいから、その一編の序文のようだ。しかし、この文句の解説ページがWeb検索で見つからず、当てずっぽうで読む他は無い。どうせならもう少し親切な注釈を望みたい。「孟嘗」は「孟嘗君」の説明が<(?-前279頃)中国、戦国時代の斉の王族。姓は田、名は文。各地の有為の士を食客として数千人も養い、勢力を振るった。戦国末の四君の一人。>と大辞林にある。「雍門」は都の門のようだが、「遭うて泣く」が都を追放されたのか、敗戦でやっと帰り着いたのか、その他なのか分からない。「琴之感」は<琴の調べの響き>だろうが、意味は<都の華やぎ>かと思う。問題は「以未」なのか「未」なのかだが、「既に未だ」は冗句で無ければ錯綜なので「以未」は却下し、「未なるを以って(終わりそうなので)」の「以未」を可としたい。どうやら「文選」の漢文サイトを散見しても、「以未」と表記されているようだ。良くは分からないが、都の門前で将軍が枯葉を見て国の衰退を感じた、もののように解して置く。

と(と文選の句を)、うち誦じたまひて(口ずさみなさって)、

「\*琴の感ならねど(私が弾いているのは六弦で今言った文選の文句に有る七弦とは、調べの響きは違いますが)、\*あやしくものあはれなる夕べかな(しみじみと物哀れを感じる夕べですね)。\*なほ、あそばさむや(もう少し弾いてみましようか)」 \*「きんのかん」は「文選卷四六一豪士賦序」の続き文で、和琴(わごん、六弦)と琴(きん、中国古琴七弦)が別の楽器であることを洒落て言ったものなのだろう。因みに箏(さう)は十三弦。さらに「賦序」にある憂国の意味も、女子供に対してはともかく、少なくとも大臣は自分自身に対する立后失敗の苦笑いとして自嘲しているに違いない。女だてらに漢文に長じた作者の面目躍如、といった



感だ。 \*「あやしく」はくいつになく、ただならず>で良いのだろうが、あえて「文しく」と読んで<水紋・木目>の連想から、楽器の音の「感」だけに波動で胸に押し寄せてくしみじみと感じ入る>と洒落て、言い換えの道楽を試みてみた。 \*「なほ、あそびさむや」はくもつと演奏しましょうよ>と誰かに呼び掛けたとも解せるだろうが、必ずしも誘い文句でも無く、場への断りとして<もう少し弾きましょうか>と自奏の意を示した、とも解せる。そして、自奏の意と取った方が下の文を素直に読めるので、そうする。

とて(と興じて)、「\*秋風楽」に搔きあはせて(「秋風楽」という曲の伴奏を御自分で爪弾くのに合わせて)、唱歌(さうが、歌い)したまへる声(なさる大臣の声が)、いとおもしろければ(とても風情があったので)、皆さまざま(皆それぞれに、深く感じ入って)、\*大臣をもいとうつくしと思ひきこえたまふに(大宮が姫君ばかりか大臣までさえもとても愛しいと思ひ申しなさるほどの場の盛り上がり)、いとど添へむと\*にやあらむ(さらに彩を添えようというのでしょうか、偶然にも)、冠者の君参りたまへり(源氏の若君が二条東院から大宮の許へ帰参していらっしやいました)。 \*「しうふうらく」は雅楽の曲名とはあるが、曲自体は今に伝わっていないらしい。 \*「おとどをも」は注に<主語は大宮。係助詞「も」は同類を表し、孫の雲居雁と同様に息子の内大臣もの意。>とある。 \*「にやあらむ」は「まゐりたまへり」の因果付けの強調なので<偶然にも>を補語した。

「こなたに(こちらへどうぞ)」とて(と若君を)、御几帳隔てて(姫とは几帳で隔てた席を設けて)入れたてまつりたまへり(大宮は部屋にお入れ申しなさいました)。

「をさをさ対面もえ賜はらぬかな(ゆっくりお目に掛かる事も出来なくなっていましたね)。などかく、この御学問のあながちならむ(なぜこうも、このご学問の道一筋なのですか)。才のほどより(漢学の理屈が立って)あまり過ぎぬるもあぢきなきわざと(議論ばかりが過ぎて問題が解決できない事態も良くないと)、大臣も思し知れることなるを(父君大臣もご存知なのに)、かくおきてきこえたまふ(このようにお決め申しなさるのは)、\*やうあらむとは思ひたまへながら(理由が有るとは思ひ申すものの)、かう籠もりおはすることなむ、心苦しうはべる(こうも籠もってばかりでいらっしやるというのは、気がかりです)」 \*「やう」は<子細、わけ、事情、理由>。

と聞こえたまひて(と大臣が若君にお話しなさって)、

「時々は、\*ことわざしたまへ(時々は他の事もしなさい)。笛の音にも\*古事は、伝はるものなり(笛の音にも先人の教えが伝わっているものです)」 \*此処の「ことわざ」は「事業(しわざ)」ではなく「異業」。 \*「ふること」は<伝統の知恵>。

とて、御笛たてまつりたまふ(笛を吹くようにとお渡しなさいます)。

いと若うをかしげなる音に吹きたてて(若君は若々しい真つ直ぐな音を吹き上げて)、いみじうおもしろければ(実に場が改まったので)、御琴どもをばしばし止めて、大臣、拍子おどろおどろしからずうち鳴らしたまひて(軽く鼓で拍子を打ち鳴らしなすって)、

「\*萩が花摺り(私の着物は萩の花摺り)」など歌ひたまふ(などと催馬楽の衣替の歌を時節柄に若君の出世を願掛けて唄いなさいます)。 \*「はぎがはなずり」については、注に<「更衣せむや(ころもが

へせんや)先む立ちや(さきんだちや)わが衣は(わがきぬは)野原篠原(のはらしのはら)萩の花摺りや(はぎのはなすりや)先む立ちや(さきんだちや)」(催馬楽、更衣)。『花鳥余情』は、夕霧の六位の浅葱の衣が早く昇進して色が改まるようにという気持ちをこめて歌ったものと説く。>とある。「先む立ちや」が<人に先立って>という先取の気概なり、若々しさを表しているのだろう。「篠原」は<笹原>。「花摺り」は花や葉を直接に布に擦り付ける染め方、とあるが良く分からない。水や熱は使うのだろうか。仮に色が有る程度布に移っても、そのままでは固着され無さそう。ただ、その転写された色柄で良しとするなら、なるほど早い染色方法には違いない。人に先んじる新しさ、は主張できそう。

「大殿も、かやうの御遊びに心止めたまひて(こうした管弦の遊びに興味をお持ちになって)、いそがしき御政事どもをば(忙しいご政務の合間に)逃れたまふなりけり(息抜きなさっていらっっしゃったのです)。げに(まことに)、あぢきなき世に(味気ない世の中なので)、心のゆくわざをしてこそ(せめて気持ちのいい演奏をして)、過ぐしはべりなまほしけれ(暮らせたらと望むところす)」

などのたまひて、御土器参り給ふに(おんかはらけまありたまふに、若君に御酒を勧めなさっていると)、暗うなれば(暗くなってきたので)、御殿油参り(おほとなぶらまあり、明かり油を灯して)、御湯漬(おんゆづけ、湯漬けや)、くだものなど(つまみものなどを)、誰も誰もきこしめず(何方もお召し上がりになります)。

姫君はあなたに渡したてまつりたまひつ(大臣は姫君を離れの部屋にお歸し申してしまわれました)。しひて気遠くもてなしたまひ(そのように殊更に姫を若君から遠ざけさせなさって)、「御琴の音ばかりをも聞かせたてまつらじ(姫の御琴の演奏でさえ若君にお聞かせ申すな)」と、今はこよなく隔てきこえたまふを(今では厳しく別々にお分け申しなさるのを)、

「\*いとほしきことありぬべき世なるこそ(この大臣のお考えでは可哀想な事に成りそうな姫と若君の仲ですからねえ)」 \*注に<『集成』は「困ったことが起りそうな二人の仲だこと。二人の仲がいずれ大臣に知れるであろうと危懼する」と注す。>とある。何しろ「書き交はしたまへる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折あるを、御方の人びとは、ほのぼの知れるもありけれ」なのだから、姫の入内を望む大臣の方針で、既に出てくる二人の仲が裂かれるという危懼、というか予測は避けられない。

と、近う仕うまつる\*大宮の御方のねび人ども(姫のお側近くでお仕えするこの大宮邸の古女房たちは)、ささめきけり(ひそひそ話していました)。 \*此処の「おほみやのおんかた」は<大宮邸>だが、話の流れからして何もわざわざ言わなくても省略して意味は通る。ましてとんでもない省略の多いこの物語であれば少なからず違和感を覚えたが、後の展開を見てこの態とらしさが前振りだと知る。

[第六段 内大臣、雲居雁の噂を立ち聞く]

大臣出でたまひぬるやうにて(大臣は自邸にお歸りになるかのように座をお開きになって)、忍びて人に\*もののたまふとて立ちたまへりけるを(実は密かにお手付き女房の曹司で催しの用足しを為さろうと留まっていたらっしゃいましたが猛りも果たされて)、やをらかい細りて出でたまふ\*道に(そっと身を細めて帰ろうと為さる内廊下で)、かかるささめき言をするに(斯かる若い二

人についての女房たちのひそひそ話をするのが御簾越しに聞こえて、あやしうなりたまひて(気掛かりに思いなさって)、御耳とどめたまへば(側耳を立てなさると)、わが御うへをぞ言ふ(大臣ご自身についての話しまでしていました)。\*「ものたまふ」は注に<召人に逢う>とある。「宣ふ」は<上位者が下位者に命じる>が本義と古語辞典にある。「もの」は言葉を濁しているのだからほぼ隠語で、それも「しのびてひとに(隠れて女房に)」なのだから「ものたまふ」は<男根の勃起を処理させる>のだろう。惣領は給仕をした懐かしい女の色香に上気したワケだ。また、此処の「立つ」は<一連の動作の中で一時的に留まる>に違いないが、もしかすると「勃つ」に洒落ているのかもしれない。この文自体がいくらか滑稽譚であり、女はこの手の下ネタが好きだ。だから「やをらかい細りて(すっと萎えて)」とオチを付けたのだろう。「かい細りて」は身を潜める形容として面白い語だが、必ずしもこの大臣の風体には似合わない。\*「みち」とあるのは馬道(めだう)なのだろうか。元々、この大宮邸の間取りは分からない。ただ、この「みち」は奥まった廊下とは思われる。

「かしこがりたまへど(良くお考えのようでも)、人の親よ(人の親ですね)。おのづから(そのうちに)、\*おれたることこそ出で来べかめれ(若い二人の仲を知らなかったことがはっきりするでしょう)」\*「おる」は「愚る」と表記されて<愚かになる>と古語辞典にある。「たり」は動詞の連用形に付く事実確認の助動詞なので、「おれたること」は<知らないでいたこと>。大臣が何を知らないのかといえば、男と女になっている若君と姫君の仲で、そのことを前提とした女房たちの陰口を、大臣は今知った。

「\*子を知るといふは(親こそが子供のことが分かるというのは)、虚言なめり(そらごとなめり、嘘ですよ)」などぞ、\*つきしろふ(などところこそ言い合っています)。\*「子を知る」については、注に<「明君は臣を知り、明父は子を知る」(史記、李斯伝)「子を知るは親に如くものはなし」(日本書紀、雄略紀二十三年)などがある。>とある。\*「つきしろふ」は<突付き合う>で、注には<『集成』は「つつき合っている」。『完訳』は「こそこそと陰口をたたいている」と訳す。>とある。

「あさましくもあるかな(あさましいものだ)。さればよ(そうだったのか)。思ひ寄らぬことにはあらねど(思わぬことではなかったが)、いはけなきほどにうちたゆみて(幼い様子に油断していた)。世は\*憂きものにもありけるかな(世の中は思うように行かないものだ)」\*「憂し」は<厭だ、辛い、切ない>などだろうが、<自分の思うようにならないで憂鬱であるという意>と古語辞典にある。

と、けしきをつぶつぶと心得たまへど(と大臣は事情をつぶさに理解なさったが)、音もせで出でたまひぬ(その場では音も立てずお帰りに成りました)。御前駆追ふ(おんさきおふ、お先払いの供人の)声のいかめしきにぞ(声の厳しさに)、

「殿は、今こそ出でさせたまひけれ(殿は今になってお帰りになったのですか)」

「いづれの隈におはしましつらむ(何処に隠れていらしたのやら)」

「今さへかかる(今でもこのような)御徒けこそ(おんあだけこそ、御戯れを為さるとは)」

と言ひあへり(と女房たちは言い合っていました)。ささめき言の人びとは(陰口をたたいていた女房たちは)、

「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは(とてもいい薫物の匂いが流れて来ていたのは)、冠者の君のおはしつるとこそ思ひつれ(源氏の若君がいらしたとばかり思っていましたのに)」

「あな、むくつけや(まあ、いやですねえ)。後言や(しりうごとや、あの悪口を)、ほの聞こしめしつらむ(少しお聞かせ申してしまったでしょうか)。わづらはしき御心を(悩ましいお気持ちでしように)」

と、わびあへり(と嘆き合っていました)。

殿は、道すがら思すに、

「いと口惜しく悪しきことにはあらねど(両家の婚儀はひどく残念で悪いということではないが)、\*めづらしげなきあはひに(特に気にする事も無い取り合わせと)、世人も思ひ言ふべきこと(世間にあしらわれてしまう)。大臣の、しひて女御をおし沈めたまふもつらきに(源氏の大臣が強引に弘徽殿女御を抑え付けなされたこともつれないので)、わくらばに(この姫を入内させれば、もしかすると)、\*人にまさることもやとこそ思ひつれ(他の女御に勝って後の座に着けるのではないかと考えていたので)、ねたくもあるかな(二人の仲は許したくないな)」 \*「めづらしげなきあはひ」だが是は何も、両家の婚儀が従姉弟同士だから<珍しくも無い取り合わせ>なのではないだろう。従姉弟同士の結婚が珍しくないのは確かだろうが、血縁関係の無い皇族結婚など元々が有り得ないので、世間が気にするのは血縁自体ではなく、それが意味する政権の移動である。ところが、この両家は共に故桐壺院に縁を得た名家同士であり、客観的事実として実質で一心同体である。つまり、この両家の婚儀では政権の変動が無いし、特に左大臣家藤原氏にとっては何の勢力拡大にも繋がらない。安全な結婚なのだが、長期の安泰を意味しないのである。権威と権勢に生きる政治家にとっては当然の認識だろう。この国の権威は国家統一の標したる祭祀を体現する神職の天皇家である。この王家が今に続く一族であることは世界的に稀有であるらしいが、それは然て置く。しかし権勢は、実際に政務を取り仕切る有力貴族に委ねられるし、担当官はその公費支出を自勢力の拡大に繋げようともするだろう。国を統べるには、権威者は財を必要とし、実力者は権限を必要とする。過去の権威者は尊敬はされるが、権限は今上帝を含む未来の権威者が有する。そして勢力は、天変地異だけでなく戦や技術革新によって左右される。藤原氏は未来の権威者との結びつきを求めし、源氏は藤原氏を介さない自前の勢力を得てこそ自立できる。昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵。いつに変わらぬ権力抗争の構図である。と、いささか冗長なノートをしたのには意図が有る。というのは、前太政大臣の死去後に、間もなく藤壺中宮も亡くなって光君を実父と知るに至ったこともあってか、帝は光君に太政大臣就任を促した、がその際に光君が固辞したのは、それが同時に大納言であった義兄が内大臣になることであり、それを光君が嫌った、という「薄雲」巻第四章の記事の解釈に付いて注意して置きたいからである。弘徽殿女御は父の大納言の家格ではなく、祖父の太政大臣の家格で今上帝に入内した。しかし、それは建前なので祖父大臣が亡くなれば、弘徽殿女御の後見は名実ともに大納言となる。この時点では内大臣と大納言との身分の差は歴然としているので、後の座を齋宮女御と弘徽殿女御で争えば齋宮女御の優位が保てる、という光君の読みは有っただろう。また、事実そうだった。ただ、そのことは大納言の目にもまた誰の目にも明らかな事なので、むしろ大納言の方から帝に祖父大臣亡き後の空席に光君の太政大臣就任を強く進言し、合わせて自己の内大臣昇進を藤原氏の権勢を後ろ盾にして主張し続けて来たに違いない。大納言が光君と同じ大臣の位に就いていれば、弘徽殿女御が立後の優位に立てるからである。つまり、この図式は光君の深謀遠慮なのではなく、大宮でさえ「故大臣の思ひたまひて、女御の御ことをも、あたちいそぎたまひしものを、おはせましかば、かくもてひがむることもなからまし」と認識していた周知の事情なのであり、光君がその時点での太政大臣就任を固辞しえたのには藤原氏内部の不安定さがあつたに違はなく、確かに光君がその内紛を利用した側面はあるにしても、またいくら光君が帝から絶対の信任を得ていたとしても、単に光君一人の恣意で政局が決まったのではない事を、この「めづらしげなきあはひ」という言葉で作者は描いているのだと思う。多分それがこの物語の深さなのだろう。 \*「人に勝る」は単なる意地の張り合いではない。弘徽殿女御の立後に失敗した左大臣家にとって、右大臣家勢である朱雀院の第

一子が立太子されている以上、その皇太子に姫を入内させて後の座を狙うのは、権勢の保持からして主要な命題なのである。勿論、大臣自身が右大臣家の四の姫を正夫人としている事からして、他の搦め手も色々と打ちようは有るだろうが、立後は第一の正攻法である。

と思す(とお思いになります)。

殿の御仲の(殿と源氏大臣の御仲は)、おほかたには昔も今もいとよくおはしながら、\*かやうの方にては(こうした立後の件に付いては)、挑みきこえたまひし名残も思し出でて(何かと張り合い申ししていた昔の競争心も思い出しなさって)、心憂ければ(いまいまいいので)、寢覚がちにて明かしたまふ(熟睡出来ずに夜を明かしなさいました)。\*「かやうのかた」については、注に<『完訳』は「権勢を張り合うという方面」と注す。>とある。大臣にそういう意識構造はあるとは思いますが、此处では話題に沿って<立後の件>で良いのではないだろうか。また、同様の権勢欲を使命とする大藤原にしてみれば、光君の独自性などは可愛いものだろうが、個人的な張り合いでは負け込んでいる大臣としては「心憂し」と実感した、と読むのがこの話の味わいかと思う。

「大宮をも(大宮にしても)、さやうのけしきには御覧ずらむものを(そうした二人の様子にはお気付きの筈なのに)、世になくかなしくしたまふ御孫にて(特別に可愛い内孫同士なので)、まかせて見たまふならむ(成り行きに任せていらっしゃるのだろう)」

と、人びとの言ひしけしきを(と女房たちが言っていた光景を)、ねたしと思すに(腹立たしくお思いになると)、御心動きて(次第に不満が募ってきて)、\*すこし男々しくあざやぎたる御心には、静めがたし(なにぶん男らしく物事をはっきりさせたい御性分なので抑えられません)。\*「すこしををしく」は、注に<『完訳』は「勝気で物事にはっきり決着をつけたがる性分。内大臣の性格として特徴的」と注す。>とある。